

日本語の中の漢語（62・6・20）

日比野丈夫（S8文丙）

私は昨年までこちら（三高会館）の運営のお仕事をさせていたただいておりまして、三年間勤めましたのでございます。その間にはいろんな方々にお願いをいたしましてお話をしていただけ、私はただそのお世話をしたり、御紹介したりしておりましただけで、自分が話をするという心配は全くなかったのでございます。ところが、辞めさせていただきますと、さあ今度はお前の番だといわれまして、暫く御猶予を頂いておりましたが、おことわりもできませんので、ちょっと勉強をしてまいりました。

さて話し言葉というものは、大へん変遷の多いものでして、普通に私たちが使っている言葉は、ごくわずかの間に意味が変わったり、まったく反対になったりするものがございます。今日私が漢語と申しますのは、漢字を組み合せた言葉、あるいは漢字一字でもよろしゅうございますが、それが日本語の中で使われているものという意味でございます。新旧の差にかかわらず、漢字が

単数であろうと複数であろうと、そういうものを一応漢語と申すことにいたします。こういう言葉は非常に安定しているとお思になるでしょうが、例えば挨拶という言葉でございます。挨拶というのは中国の非常に古い時代、漢の天子でございましょうか、泰山に参られましたときに、その地方の役人達が挨拶して御目通りにやって来たと言っています。つまり次から次から押し合いながら、我勝ちに天子にお目にかかりに来たということで、挨拶々々という使い方もございます。今日日本で普通に使っている挨拶という言葉はそれとは違って、禅宗と一緒に入って来たようでした、師匠が弟子に向かっていろんな問いをかけます。それに対して弟子がお答えを致しますが、これによって師匠はその人物を判断したり、あるいは教え諭してやったりいたします。このようにして師匠が弟子に試問することを一挨拶などと申しますが、禅問答と申しますように内容はすこぶるわかりにくいものがございます。それはとにかく、挨拶というのはこれから来ていると思えますが、中国の字引を見ますと、日本で挨拶というのは時候の暑い寒い、あるいは健康状態等を、お互いに問い合うことであると書いてございます。

しかも挨拶という言葉は私たちの常識では、階級や年齢から見ても、上から下という言葉ではないのでございまして、下の人が上に対して挨拶をするのであります。おじさんにご挨拶しなさいとか、先生にご挨拶しなさいというのが本来でございまして、天皇陛下が国民に対してご挨拶なさる、そんな事は絶対にありえないのでございます。

しかし私どもは商売柄、特に私立大学などにおきましては、高い壇の上から御父兄に対して御挨拶を申し上げますというのですが、これはへり下っていつているのでございまして、本来の意味からいえばはずれているのです。

つぎには「御苦勞」「御苦勞さま」という言葉ですが、これは上から下に対するねぎらいやいたわりの意味をもっております。昨年私は非常に驚いたことがございます。天皇陛下御在位六十年の式典のときに、総理大臣の中曾根さんが陛下を前にして、「陛下長い間いろいろと御心配をいたしました」といようなことをいって陛下にお礼を申し上げた後、「陛下ごくろうさんでございました」と申しました。これには私びっくりいたしました。これについて、いろいろの人に意見を聞いてみましたが、一向それに対する反応はございませんでした。翌日の新聞を見ますと、「中曾根の面目躍如たるものがあつた」とそう書いてありました。いくら時代が変わつたといつてもこれはよくないことでございます。それではどういつたらいいのかといえ、やはり「恐懼の至りでございます」といふべきでありまして、昔だったら「臣子たるもの万死に値す」とか、いろいろないい方もございました。御苦勞さんというのは、これは使用人にいうのと同じことであります。

次には中国で普通に使っております口語でございます。それは俗語とも申しまして、昔、私どもが習いました漢文、つまり唐宋八家文のような、そういうのとは違つた日常語でございます。

俗語でもよほど早く日本に入ったものは本来の意味とあまり違っておりませんが、近代に入ってきたものは、日本で非常にそれをうまく使っていることもある代りに、間違つて使われる場合も多いということをちよつと申し上げておきます。

路線という言葉がございませぬ。このごろ盛んにはやつております言葉で、中国から入つてまいりました。あるいは一辺倒、あるいは洗脳なども同類でございませぬ。ところで路線というのは、日本では専ら政治的な傾向と申しますか、イデオロギーをもつたある方向というふうにのみ使われているようでございませぬ。思想的、政治的な点においてある人脈に繋がるような場合にも誰々の路線という言葉を使つております。しかし、中国で一般に使う場合はそうではないのでございませぬ。普通に路線というのは、古い言葉にいい変えますと道路、道ということでありませぬ。ですから演説や何かに路線という言葉が出て参りますと、それを文語に書き直す必要があれば必ず道路と申しております。だからこういうふうに日本に中国の言葉が入つて来た場合に路線—線路という言葉は別にあります—とは中国では単なる道路という意味に過ぎませぬのに、日本では特に政治的な方向にのみ使われております。つまり中国の言葉が日本に入つて来ても、そのままではなくいろいろと変わっていくという一つの例でございませぬ。

それから今日普通我々が使つております漢語の中に、日本人が作つたと思ひこんでおりますものが割合にございませぬ。しかし、日本の幕末から明治の初めにかけまして、中国では西洋の法律

や科学技術など、いろいろの書物が漢文に翻訳されました。その中心は最初は今日のマレーシアのマラッカでしたが、のち香港（アヘン戦争の後に香港がイギリス領になりました）に移ってきたのであります。つまりイギリス人がマラッカで設立したアングロ・チャイニーズ・カレッジというのが、香港へ移ってまいりまして、そこで西洋のいろんな書物を翻訳して出しました。そのカレッジが今日の香港大学になったのですが、やがて西洋文化輸入の中心は上海に移りました。香港や上海で出版されました書物の中でどなたもご存じの有名なものが、アメリカのホイートンの「万国公法」でございますが、それが日本にもたらされてまいりまして、これに日本で訓点、送リガナを付けて、出したのであります。これは非常に流行いたしました。その中に義務、権利、あるいは自主とか自治とかいう言葉が使われておりまして、幕末から明治にかけて新しい日本語として使われ、今日まで続いてきたのでございます。それから解剖や医学に関する書物も随分ございまして、明治の中ごろになりますと、逆に日本の方で西洋の本を日本語に訳したものが、中国にどんどん渡ってまいりました。中国では西洋の本を直接見るよりは、日本語の漢字の入った方がつとり早いわけです。留学するのも欧米へ行くには金もかかるし遠いので、日本へ来たほうが楽だというのでどんどん日本へ留学生が来た時代でございます。ですから今度は日本から新しい言葉（日本製漢語）、特にテクニクに関する言葉が中国へ盛んに輸出されました。

そこでおもしろいのは、最近でも場合、つまり何々の場合なんていう言葉が、新しく中国に入

っているのですが、それから広場、天安門広場とかいう広場ですね、あれは日本人に分かり易いように広場といっているのではなくて、中国でもそういっているのです。あるいは場所という言葉も日本から割合新しく中国に入っているのでございまして、中国の人々は普通に使っているのです。

次には日本で作ったのではないかと思っております、欧米の地名に関する言葉でございます。この頃の若い人には分からないでしょうが、牛津、劍橋など、今日も中国の人は普通に使っております。牛津（ニュージン）はオックスフォード、劍橋（ジェンチャオ）はケンブリッジでございます。私初めは日本人が作ったのだと思っております。けれどもそうではないのでございまして、香港辺りで早くヨーロッパの書物が漢訳されましたときに出来たものであります。その次には紐育、これをどうしてニューヨークと読むのでございましょうか。北京語の発音でしたらニューイであります。私迂闊な話でございますが、だいぶ前に広東語の発音だと育（北京音ではイ）をイヨクということがやっとわかったのでございます。育は日本の発音はイクでありまして、北京音よりも、むしろ広東音に近いわけです。香港の言葉は今日でもすべて広東の発音なのでありますから、紐育というのは香港製に違いありません。

少しづつ逆上って古いところへ参りますと、江戸時代には中国の戯曲や小説なんか随分盛んに入っていました。「金瓶梅」というのもその一つでありますし、「三国志演義」、「水滸伝」、

「西遊記」など、そういうものが入って参りますと、古い漢文（いわゆる古典）にはない新しい漢語が、日本語の中にどんどん使われるようになって参りました。思いつき次第に申しますと、多分、大分、これなどはみな中国の戯曲小説から入って来た普通の言葉でございます。世故（せこ）にたけているという世故もそうであります。出色（しゅっしょく）というのもそうであります。このような言葉は古典には出てこないのでございます。自今、局面、拍手喝采の喝采、こういう言葉も私たちが昔習いました漢文の中には絶対に出てこないのでございます。綽名（あだな）、体面とか面子、そういうものも同様でありますが、今申しましたような例は日本で使われるようになりましても、意味は中国本来の意味と同じでございます。

ところが、中国と日本とは意味が違う例を申しますと、分際、大学生の分際でなどというときに使う言葉ですが、中国本来の意味では丁度適当な時にといい意味でございます。安置、日本では仏像などを安らかに置くことですが、中国ではおやすみなさいという意味なのでして、お互いに寝るときに交す言葉でございます。弟子、これは日本という弟子でも通じますが、芸者のこととあります。それから決裂、これは談判が決裂したというふうには使いますが、中国では解決したという意味らしいのです。普通に朋友といえ、友だちですな。ところが小説などを見ると、人に使われている職人のことを朋友と申しております。首尾、これは官と民との間のややこしい関係をさす言葉で、人民から物や金をもらい、それに対して役人が特別の便宜を計って

やるような場合を申します。それからちよつと思いついたので申しあげますが、調和という言葉がございませぬ。これは味を整える材料、調味料という意味です。例えば醤油、味噌、油、酢そんなものをいっているのでございます。

また一張羅と申しますと、日本では他所へ着て行く一番等の外出着ということでございますが、中国で張羅というのはお客さんを招待してもてなすという意味がございませぬ。それから遺漏という言葉ですな、遺漏というは日本では何か間違いがあつたという意味に使われませぬ。しかし、中国では、水が漏れたのと違ひまして失火という意味になるようです。つまり間違つて火事を起したことを遺漏というようでございます。ですから日中は同文同種だといひながら、思いもよらぬ変な出来事が時々起つてくるのでございます。日本で穩便にそこはよろしくやって下さい、という穩便とは中国ではどういふ意味かといひますと、「まあどうぞごゆくりなさい」といふ意味のようでございます。温存するといふのは、中国ではどういふことかと申しますと、温かく人にたずねる、人を慰問するといふ意味なのです。存とは存問の意味でございます。

もつとおかしいのは、暗算といふと、これは悪い企らみをするといふことです。結納という言葉は普通どういふことに使うかと申しますと、もてなすとか、その人に取り入るとか、そういう意味に使われております。それから失望落胆の失望といふのはどうかと申しますと、見てもよくわからないという意味で、望は望見の望であります。もう一つ二ついつてみますと、喫茶とは、

結婚の約束をしたとき、お茶を飲み合つてそのことを決めるといふことでございます。それから作家というのは日本では小説を作る人ですが、中国では始末や、あるいは所帯持ちのよい人のことをいうそつでございます。

こういうことをいちいち申しておりますと、きりがございません。この頃テレビで有名な水戸黄門というのがございます。これは中国の古い役所に門下省というのがありますが、後漢時代には黄門省と申していたのでございまして、その長官を黄門侍中といつて日本では大納言、次官を黄門侍郎といつて日本では中納言に当ります。徳川光圀は中納言で中国の黄門侍郎なのですから、簡略にただ黄門さんと申していたのでございます。

ところが、もし中国の人に黄門といつたら、大部分の人が宦官のことだと思ひます。と申しますのは、黄門省（門下省）という役所は天子に非常に接近しておりまして、天子が未成年で皇太后や太皇太后が代つて政治をされるときには、そこにつとめてゐる宦官が大臣たちとの連絡に當るわけでございます。従つて、その宦官は特に重要だつたために尊敬を受けて黄門といわれ、一般の宦官まで黄門と呼ばれることになつたようでございます。

またお茶の家元に官休庵といふのがございますな。地名によつて、武者小路とも申しまして、ご当主が三高出身であることはご存じだと思ひます。初代の千宗守は宗旦のむすこで、高松藩に仕えておりましたが、官を辞めて京都に帰り、自分のお茶席を官休庵かんきゅうあんと名付けたのが、その始ま

りでございます。ところで、中国の本を見ますと、官休というのは、何か事件が起つたときに役所に訴え裁判によつて結末を付けることをいうのです。その反対が私休でございます。役所に訴え、公然と結末を付けるのではなくて、個人間で示談などによりこつそりと話し合いをして結末を付けるという意味でございます。

だから、漢字で書いてあればどこへも行って間違ひはないと思つていたら、これが間違ひのもとでございます。漢字を使うにはそれだけの知識が必要なのでございます。老婆心という言葉がございますね。「老婆心ながらこう申しておきます」といった類でして、普通日本では年寄りのお婆さんのつもりで申しますから、余りお役には立たないでしょうが、まあ一つ聞いておいて下さい、というくらいの意味です。しかし、中国では老婆といつたら嫁さんということでありまして、年齢には関係ないのでございます。中国では若い人（結婚したての人）でも、自分の奥さんのことを老婆（老婆兒とも書きます）と申します。禅宗の「臨濟録」などには老婆心切という言葉がありますが、これは老婆つまり妻であり母である人は非常に世話焼きなものであつて、自分の子供や孫をかわいがり、何くれとなく無駄かと思われくらい世話をするのだという意味でございます。非常に親切にすることを老婆心切と申すのが、中国では本来の使い方でございます。

それから、やくざの仁義という言葉がございますが、あれも割合新しく中国から入ってきたも

のでございます。江戸時代のやくざの間で流行いたしました一宿一飯の習慣というのは、実は中国の禅宗のお寺で行われていました約束ごとと全く同様でございます。それはそのまま日本に伝わりまして、禅宗のお坊さんがどこでも禅宗のお寺へ行つて「おたのもう」といえば宿と飯、しかも一宿一飯ではなく一宿二飯のもてなしを受けることができます。今もその通りですかと、天龍寺の平田老師に聞きましたら「ほんまにそうです。江戸時代のやくざの仁義と似ています」と申されました。しかし、この頃はいつでも泊つてもらふ訳にはいかないので普通は千円渡して帰ってもらいますとのことでございます。

考えてみますと、禅宗というのは、中国が南北に分裂して大混乱に陥りましたときに起りました、純中国的な仏教の一派でございます。禅宗の祖は梁のときインドから渡つてきた達磨だといわれておりますが、二代の慧可がその弟子にしてもらったときのいきさつが大変です。慧可はどうしても自分を弟子にしてくれと頼みますが、達磨は絶対に聞き入れてくれません。それで慧可は自分で自分の腕を切り落とし、血のしたたる腕を捧げて達磨に見せ決意のほどを示しましたので、とうとう達磨は閉口して弟子にしたと伝えられております。雪舟がその様子を描いた絵が有名でございます。このような伝説からみましても、本当に禅宗というのは非常に激しい、暴力団と相通するようなどころがございます。その教団に入れてもらつたらもう大丈夫、どこへ行つても、どんな辺地へ行つても、禅宗のお寺を訪ねて行きさえすれば、ちゃんと守つてもらえると

いう組織が出来ておったようです。だから慧可も実は誰か敵にねらわれて片腕を切られたのですが、ようやく同志のいるお寺にたどりついて生命拾いをしたのではないかとすることも考えられるのでございます。いつか禅宗学者の古田紹欽さんから、そんなお話を聞いたことがございます。

さて仁義ですが、仁義というのはやくざの間で交す挨拶、日本では「おひかえなすって、関東と申しましても広うござんす」という、あれから始まります。中国では仁義というところ「三国志演義」などに出てくる言葉であります。秘密結社のしきたりとして、誰か同志のものが故郷をのがれて、当地の舟着き場までやって来たということがわかりますと、こちらから若い者が迎えに参りまして「よくいらっしやいました。あなたは仁あり、義あるお方でいらっしやいます。もつと早くからこちらにおいでになることを聞いておりましたら、私一人が迎えに来るといふような失礼なことは致しませんでした。道路を掃除いたしました、そこに砂をしき、一町おきに屋台を作つてそこでお茶を飲んでいただくように設備もいたしましたのに。本当に失礼なことでございます」と、そういう口上をちゃんというのでございます。これは迎えに行つた方が申すのでございますが、日本の仁義は逆にそこへ行つた方が申します。これに対して出迎えを受けた人は、「恐れいります、御丁寧な御挨拶で痛み入ります」とそういうふうには挨拶をさせていただきます。このようにしてお互いの口上がちゃんとしきたりに合つておれば、仲間同志だといふ共通意識と安心感が固められるのであります。つまり水滸伝の豪傑連中が梁山泊を中心に、宋江を親分とし

て作り上げた団結をまねているのでございます。また「三国志演義」によりますと、劉備を中心として関羽、趙雲、張飛の四人が義兄弟の契りを結んだということになっておりまして、中国の秘密結社はこれを模範として作られたものが多うございます。ですから清朝が滅びまして中華民国になりました頃は、非常に世の中が乱れておりまして、水滸伝的な秘密結社があつち、こつちにいっぱい出来ました。つまり今日の日本で何々組、何々組というのがぞくぞくと出来たようなものでございます。それで中国政府は水滸伝を読ませないように発売禁止にいたしました。確か民国五年の頃、大正五、六年のことですが、そんなことをした時期もございました。

話は別になりますが、江戸時代には長崎を通じて入ってまいりました長崎言葉というものがございまして。これは胡散臭（うさんくさい）とか、胡乱（うろん）とか、七転八倒（じたばた）、算盤、湯湯婆（ゆたんぼ）などたくさんございます。湯婆（たんぼ）というのは中国の言葉でありまして、それにもう一つ日本語の湯（ゆ）をつけて湯たんぼというのです。それから暖簾（のれん）、暖簾になぜ暖かいという字をつけるのかと不思議に思われるかも知れませんが、実は暖簾は暖かいのです。北京あたりで暖簾と申しますのは、店屋で入口一杯の大きな木の枠の中に綿の入った蒲団のようなものがしかけてありまして、釘でつるしてあります、外から中へ入るときはこれをトンと押して中に入るのでありますが、すると外の温かい空気が入って来ませんで、中は冷として涼しいのであります。それは夏のこと、冬は逆になります。外からは冷たい空気

が入ってこないし、中の温かい空気が外に出ないようになっております。日本の暖簾は軽いので、暖簾に腕押しということを申しますが、中国では腕で押さなければ中へ入れないわけでございます。日本の暖簾は中国でいえば帷、西洋でいえばカーテンでございます。

もう少し長崎言葉について申しますと、例えば、食用の萌やしなんかも長崎から入って来た言葉でございます、これは麦芽子という中国語でございます。それからもう一つじゃんけんホイのじゃんけんです。けんじゃんともいったりしますが、ある本によりますと、あつちとこつちと両方でやるから両拳（リヤンケン）だという説明がしてあります。これは私の考えなのですが、そうではなくて、湯たんぽと同じように同じ漢字を二つ重ねたのではないかと思えます。拳（中国音ではジュアン）だけではわかりませんので、下に同じ字をつけてこれを日本音で読ませ、じゃんけんというたのではないのでしょうか。逆さまにすれば、けんじゃんでございます。もちろん、拳という遊びも江戸時代に長崎を通じて中国から入ったものでございます。

それよりも古く禅宗が鎌倉、室町時代に入って参りましたとき、同時に禅宗の言葉が入ってきて日本語となったものがございます。それと江戸時代に出来上った長崎言葉がどのように関係するかということは、文献を調べますとある程度はつきりするのでございますが、私はまだよくやっております。普請（ふしん）、行灯（あんどん）、点心（てんじん）、饅頭（まんじゅう）、鯛（うどん）などがそうでございます。東司（とんす）といえは禅宗のお寺の便所のことござい

います。戦争中ですが、新町の五条辺に東司産業という会社が出来まして、トーシさんといっておりました。おかしい名前なので改められた方がよいと思っておりましたが、やがて会社そのものがなくなりました。

それからもつと古く日本に入ってきた漢語にも、いろいろと変遷がございます。今日お辞儀をするといったら、ちよつと頭を下げるだけでございますが、本来の意味から申しますとそれは間違ひでございます。いったい礼儀というものには辞儀、行儀、それから書儀という三つのものがございます。それをみんな一緒にしたのが礼儀でございます。申すまでもなく、行儀というのは立居振舞いの仕方、きちつとした法に適つた行いがそうであります。書儀といひますのは手紙の書き方、もう一つの辞儀とは口上の述べ方でございます。私どもは子供のとき人から物を貰つたらちやんとお礼をいわねばならぬ、時候に応じた挨拶をし、相手方にはお変わりございませんか、といわねばならぬと教えられたものです。それが本当のお辞儀なのであります。時とともにだんだん変わつて参りまして、一言もものをいわないで、ただ頭を下げることをお辞儀というようになりました。つまり行儀の一つになつてしまつたわけでございます。

それから旬(しゅん)、例えば筍の旬、鮎の旬、えんどう豆の旬などという旬のことでございます。もともと旬(じゅん)というのはもちろん十日ということでございます。中国では大変古くから十日を一区切りとして日を数える習慣がございます。十日ごとに甲乙丙丁といわゆる十

干の名をつけ、一か月を上旬、中旬、下旬と三つに分けるのでございます。十日を一単位とした旬（じゆん）が、どうして物のとれる丁度よい季節という意味の旬（しゆん）になったかというわけは、いささか複雑でございます。むかし中国で唐の時代には文武百官が毎朝暗いうちから宮城前の広場に集まり、門の開くのを待つて宮中に入り、一同こぞつて天子に御挨拶申し上げ、天子からことばを頂戴してから、政務につくというのが習慣でございました。日本でもその通りにしていたのでございますが、それが毎日の行事となりますとやはり大変でございます。日本ではそのような儀式が平安朝の初めまでは行われていたようです。しかしだんだんそうした形式的な儀礼はやめようということになったのか、あるいはその式場ともいべき大極殿が焼けてから實際上できなくなったのか、どちらか私は存じませんが、十日ごとにしましようということになり、その日を旬の日といったものと思われます。時代がたつてもっと簡略になりますと、その旬という言葉だけは残りましたが、実は春夏秋冬の四季にそういう形式的な陛下に対するご挨拶の会をするようになり、それを旬というように変つて参つたのでございます。それがさらにだんだんと変わりました、時期または季節という意味から、何かをするのに一番よいとき、食べものならば、それをとるのに最適の時期という意味の言葉になつてしまつたのでございます。

また越度（おちど）という言葉があります。それは中国の古い法律用語でございまして、パスポートなしに関所を越えることを申します。関所破りのことでございます。越度の度というのは

サンズイヘンが付いているのと同じ渡るといふ意味でございます。つまり不法に関所を渡り抜けるということでございますが、やがて一般に悪いことをする、さらに失敗をするといふ意味が普通になって参りました。そのうちに越の変りに落といふ字を書いたりいたしまして、「あの人に落度はない」とか、「こちらにも落度があつた」とか、そういう不注意とか不行届きを落度と申しますが、本来は越度（渡）からきてるのでございます。

それからお酒を作る人を丹波杜氏とか但馬杜氏とか申します。この杜氏という言葉は、私も初めは中国がもとだと思つておりました。しかし、よく考えてみますとそうでもないようでございます。むかし日本では大きな所帯の家でございますと、家の中を世話してきりもりする刀自といふ女の人がおりました。とじともとうじとも申します。もともとお酒といふのは貴重なものでございまして、毎日朝から飲むとか晩酌するとかいふ贅沢なことは昔はできなかったのでございませぬ。神様のお祭りですとか、祖先を祀るとか、一年の特別なときだけにしか作りませぬ。しかも、それは女の人が作つたのでございまして、その家を管理する刀自が指揮してお酒を作りそれを管理することになっております。そうして大切な行事の場合に、その酒を一家一族の人に分配するというようなことまでこの刀自がやったようでございます。だから刀自とはお酒を作る人といふ意味にもなりましたが、これを杜氏と書きますのは中国の知識から来ております。有名な「蒙求」といふ本にも出ておりますように、「杜康酒を作る」といわれ、中国で杜康といふ人が初め

て酒を作ったという伝説があります。杜康とは黄帝の時代の人とも、周の時代の人とも申しませんが、もちろん歴史上の人物ではございません。それはとにかく、日本では近世になってなぜ酒作りの人を杜康といわないで、杜氏（とうじ）といったのでしょうか。江戸時代の人の随筆の中に、酒は藤二郎という人が初めて作ったから、その名を取って杜氏というのだ、なんていい加減な説明をしているものもございます。しかし杜氏という文字そのものは、中国の杜康からきたことは間違いないと思います。漢学者のさかしらと申しますか、古い日本語の刀自を同じ発音の杜氏に変えたのでございます。私どものように中国のことばかりやっておりますと、杜氏は杜康だと問題なくきめてしまうのですが、ことはそう簡単でないことが思いやられます。

終りに、これは付録みたいなことになりましたが、明治以後に日本人が作った漢語についてちょっと申し上げます。最近誰でも使うのですが、芸能人という言葉でございます。私一人の考えなのですが、明治以前には芸能人という言葉はなかったと思います。芸人という言葉は古くからありますが、ではそれと芸能人とはどこが違うのでしょうか。この頃の方面の人に向かって芸人といえば、怒ってわしは芸能人じゃとい返す人が多いようです。しかし、私の考えでは芸能人というのは明治時代ならちゃんとした立派な職業を持っている方で、趣味的にあるいは二次的に何かを趣味として楽しんでおられる方であろうと思います。それは内藤湖南先生が副島種臣伯爵、元外務卿が明治三十八年に亡くなりましたとき、朝日新聞に追悼文を書かれましてまた明治維新

の元勳の一人を失ったというよりは、一芸能人を失ったということを我々は悲しむといつておられます。副島種臣（蒼海と号す）は書の方で非常に偉い方でありまして、我流の書ではありませんが、今日わが書道界において非常に高い評価を受けております。内藤湖南先生らもその当時既にそれを認めておられたのであります。また副島種臣は詩人としてもすばらしい方でございます。だから、明治時代に芸能人といわれたのはよほど偉い人であつて、自分の芸を売つて金を儲ける人ではなかつたことがわかります。芸を売つて金をとるのは悪いことではなく、それは芸人といふれっきとした職業であつたわけです。今日では本来の意味がわからなくなつて、混同されてしまつたのでございます。

それから病気にペストというのがあります。これを黒死病と書く人は現在では殆んどなくなりましたが、中国の字引には今日でも黒死病と書いてあります。その意味はペストにかかつた鼠が死ぬと、腹がまっ黒になつてゐるからだと思つたことがあります。しかし、黒死という字の中国音はヘイスーですから、ペストの発音を漢字であらわしたのであらうと思ひます。しかもこれはよほど前のことでございますが、もう亡くなりました先輩から聞いたところによりますと、黒死病というのは湯浅廉孫先生が作られた言葉なんだそうです。ですから湯浅先生のお若かつた頃の中国の字引に黒死病というのがあつたかどうか、大分調べてみました。未だにその結論を得ておりません。あるいは伝説かも知れません。あるとき先生の御子息の湯浅幸孫さんに聞いてみ

ますと、自分は親父からそんな事は聞いていないと申しおられました。

最後になりましたが、是非氣をつけていただかねばなりませんのは、人の名前をつけるときでございませぬ。雅号も同じことですが、漢字の意味が日本ではいかに立派でありまして、中国人からみた場合、意味が全く違つておりまして、驚くどころか、噴飯に耐えないようなものがままたあるのございませぬ。このようなことがありますと、自分自身が卑下することになりますのはもちろん、相手方にも変な氣持を起させることになります。お互いに漢字民族であるという近親感をもつ以上は、できるだけ共通の理解が得られるようにしたいものございませぬ。さらに申しませぬならば、今日ほど漢語が日本語の中で意味もわからずに使われている時代は少ないと思ひます。あるいは昔からそうだったのかも知れませぬが、日本語の中で漢語も迷つてゐるし、日本語そのものも混乱してあります。そこへ漢字の制限をいたしましたものですから、制限内の漢字ならどんな使い方をしてもよいだろうということになり、むちゃくちゃな熟語がどんどんできてきております。漢字の混乱はそのまま日本語の混乱であるとまでは申しませぬが、よほど氣をつけねばならないことございませぬ。私たち日本人は今、困つてゐるだけではなくて、古く奈良朝の時代にも平安朝の時代にもあるいは鎌倉時代にもこういうことが度々ございまして、困りに困つたあげくそれを何とかくぐり抜けてきたのです。従つて、今こそ日本語の危機だ、日本語はどうなるといつてゐるのございませぬ。こういうときを通過してこそ日本語がだんだん良くなり、そ

して洗練されて行くのだとは思いますが、これは私たちが日常生活の上で努力実践しなければならぬことでございます。今日は実はそういうことをいいたかったのでございまして、よりよい日本語を子孫に残すのが私たちの任務なのでございますから、現状を安閑と見過しているわけには参りません。その責任は重大でございます。もう一時間五分になりました。これでよろしゅうございますか。

御清聴ありがとうございました。

(京都大学名誉教授
大手前女子大学学長)